

短歌（二十二）

下田 明美

愛らしいピンクの蕾み膨らんで

カリンが一番美しい時

奥様に付き添われているご主人は

限りの力で車椅子こぐ

ズキズキと腰が痛んでちじこまる

いつまで続く「春は名のみ」

窓際に寄って白梅眺めれば

動くものありメジロ、ヒヨドリ

早春に白い花咲くお彼岸に

黄色の花咲く自然の習わし

部屋中に庭で咲く花飾り立て

嬉しいことよ生きていることは（？）

白梅にメジロのつがい飛び交えば

何故かヒヨドリ遠慮している

花散ればメジロ、ヒヨドリ来なくなる

蜜はもう無い、青い梅の実

ゆったりと流れる河の兩岸に

ピンクの並木、河津の桜

白浜の砂に残る足跡を

荒波が引く旅立ちの時

無意識の反対神経働いて

水たまり飛んだ、独りの老女

眠られぬ夜はラジオを聞くのだが

よく眠っていた、新聞届く

リビングに時々出没したものは

お化けではない私なのだ

